

## 蓼科文化ゼミナール「オンライン代替企画」に参加して (A. Takata) [J]

2021年3月14日から16日まで、オンラインのZoomにて「2020年蓼科ゼミナールのオンライン代替企画」(Die Online-Alternative zum Tateshina-Seminar 2020)が開催された。パンデミックによって世界が激変するなか、初めての試みに向けて多大なる準備を進めてくださった実行委員の方々に改めて感謝を申し上げる。その御礼にはあまりに拙いものであるが、ここに参加者の一人として、初めてのオンラインゼミナールに参加した記録を、感謝の意とともに綴っていきたい。

まずは一年前のことを振り返ってみたいと思う。2020年の年明け、第62回文化ゼミナールは3月の開催に向けて、例年どおり準備が進められていた。既にプログラムが出来上がり、部屋割りやグループワークの割り振りも決まり、2月にはGruppenleiterの方々からディスカッションの指針となるRundbriefも日々メールリストで送られてきていた。しかし、1月末頃から雲行きが怪しくなったコロナウィルスのニュースは、2月に入るともはや遠い話ではなくなり、あらゆる催しが急遽中止となる状況に変わっていた。そして文化ゼミナールも開催が危ぶまれるなか、2月末に中止の連絡が入った。既に多くの方が開催に向けて準備を進めていたため、中止の知らせは残念だったが、パンデミックな状況を前にして誰も抵抗はできなかった。実行委員長の方からのお知らせには、コロナウィルスによって生じた私たちの日常の変化から今回のゼミナール中止に至った経緯、そして準備を進めてきた実行委員や各グループリーダーの方々への感謝の意までが詳細に記されていた。そして緊急事態宣言が明け、新生活様式が少しずつ私たちの日常に受け入れられた6月には、代替企画に向けての提案が実行委員長から発議された。

こうした一年間のプロローグを経て、「オンライン代替ゼミナール」は2021年3月14日から16日に開催された。通常文化ゼミナールは5泊6日の長丁場であるが、今回は口頭発表をメインとした全3日間、ドイツとの時差を考慮し、日本時間の夕方17時から21時までの、例年に比べるとコンパクトな期間での開催であった。ということで、例年長野の蓼科山でまだ冬の寒さや雪の残る一週間を過ごす文化ゼミナールは、今回は東京の自宅にて夕方まで通常の仕事や勉強をし、17時になるとオンラインで「蓼科」へ行くという不思議な体験をすることとなった。

今回の文化ゼミナールのテーマは、「幻想文学」(Die Phantastische Literatur)である。これは2020年の蓼科で予定されていたテーマをそのまま引き継いだものだ。昨年来日予定であった招待講師のHans Richard Brittnacher教授(ベルリン自由大学)も、今回ベルリンからZoomで参加くださり、まさにドイツと日本の距離を超えた初のオンライン開催が実現した。初日冒頭の開会式では、実行委員長の方から、昨年の文化ゼミナール中止から今回のオンライン開催に至った経緯、そしてオンライン開催に向けて変わらず尽力を惜しまなか

った実行委員の方々への感謝が表された。また日本独文学会理事の岡本和子先生や DAAD の佐藤プリンツさんからも、今回の初のオンライン開催という試みに寄せて挨拶をいただいた。開会式に続くプログラム最初の Brittnacher 先生の講演では、本ゼミナールへの導入として、文学における幻想というテーマに関して、主に啓蒙との対立の観点から概略と分析例が示された。例年の文化ゼミナールであれば、夜のプログラムのなかで複数回に亘る招待講師による講演であるが、今回はこれから始まるゼミナールへの導入として最初に行われた。知識や存在への確信に満ちた啓蒙の光と対照的に、世界の神秘や災い、神と悪魔の対立、また科学的進歩への懐疑を映し出す幻想は、近代自然科学の暗黒面、例えば悪夢、ドッペルゲンガー、夢遊病、磁力、魔空間、呪われた魂、人間の魂への到達不可能性などを、文学において具象化する。これらの例に応じるかのように、本ゼミナールの各発表ではロマン派、ゲーテ、ホラー、SF 小説など多岐に亘る例が示された。とりわけ、ドイツ語圏だけでなく、英語圏、そして日本文学のテキストを対象とした分析が示されたのも特徴的であった。

今回のオンライン代替ゼミナールでは、開会式でも説明されたように、例年蓼科の午後のプログラムに組み込まれているグループワーク（以下、親しみを込めて **Gruppenarbeit** と書く）がなかった。この **Gruppenarbeit** は、10 人前後のメンバーで、全体テーマに関連する個別テキストをグループリーダー(**Gruppenleiter**)の司会のもと議論していくワークショップだ。比較的小さなグループなので、発言もしやすく、普段読み慣れない分野のテキストを読む機会であり、私は毎回この **Gruppenarbeit** が大変気に入っている。これまでに 2 回グループリーダーの役を引き受けたことがあるが、自分の専門外とするテキストを勉強し、当日の議論に向けた準備を行い、蓼科で参加者の方と議論を進めていくことは、なんとも刺激に満ちて勉強になる作業であった。そのため、今回この **Gruppenarbeit** のプログラムがなかったことは残念だった。というのも、ここでは司会や議論における発言方法といったテクニカルな部分を習得するだけでなく（もちろんそれも大きい）、内容の面においても全体テーマの理解に向けた重要なプログラムを為しているからである。例えば、前日の **Gruppenarbeit** で議論した内容が翌日の講演や発表を聞くなかで思い出され、関連付けられ、何らかの新しい視点が湧き上がる。あるいは逆も然りで、午前の発表や夜の講演内容が、翌日の **Gruppenarbeit** での議論に生かされることもある。こうした全プログラムの相互連関が、一週間に亘る文化ゼミナールの醍醐味であり、そのため私にとって 5 泊 6 日は決して長いものではなく（もちろんハードではあるけれど）、その一週間を過ごしてようやくテーマの外枠に触れられる経験をしてきた。**Gruppenarbeit** に関しては、今後オンラインでも取り入れられるよう検討中と伺ったので、また新たな可能性が広がるのではないだろうか。

今回のオンライン代替企画は、先述したように、一日 3 講演から成る 3 日間のプログラムである。同時双方向型アプリ Zoom は、既に多くの参加者が経験済みであったようで、挙手機能や拍手マークが適宜スムーズに使用されている様子が見られた（なお、Zoom の使用に関しては、簡単な操作方法、また講演中はミュートオンにするなどの基本的なエチケットについて事前にメーリングリストでプリントが配布された）。これは個人的な印象であるが、

本ゼミナールの講演や議論は、オンラインになっても特に遜色はなかったように思う。発表者は PowerPoint あるいはレジュメを画面共有しながらプレゼンテーションを行い、質問者は挙手機能やマイクをオンにして発言をする。もちろん多くの者が今日感じているように、議論が醸し出す空気や聴衆の反応は、なかなかオンラインで共有することは難しいが、それでも内容伝達という点でオンラインによって漏れるものはなかったと振り返っている。発表が終わった 20 時過ぎからは、ブレイクアウトセッションを使った自由討議が開かれる。これは例年の蓼科のソワレ（夜会）をイメージしたもので、議論の続きの他、発表者を囲みでの慰労会、また懐かしい仲間との再会や歓談の場でもある。これも実行委員の方々の創意工夫により、オンライン上ではあるが、例年の雰囲気が出ていた。Break-Out-Räume は 10 部屋用意され、参加者は各部屋に自由に出入りできる（この一年で Zoom もだいぶパワーアップした）。そのため、各部屋の参加者を見ながら懐かしいメンバーに会いに行ったり、発表者に個別質問に行ったり、または招待講師の先生とお話することもできる。そして Raum10 では、実行委員の方々が今日の振り返りと翌日に向けての会議を開いていた（実行委員の方々、本当にありがとうございました）。これもまた例年の蓼科と同様である。こうして 2 日目と 3 日目も日本時間の夕方 17 時からオンラインで「蓼科」へ行き、迎えた最終日には全発表の後に総括となる Schlussdiskussion が行われた。3 日間の振り返りを行うと共に、今後の「幻想文学」の分析可能性の展望が議論され、「オンライン代替ゼミナール」は盛況のうちに幕を閉じた。なお最終日のブレイクアウトセッションも、夜遅くまで続いていた。

オンラインの功罪は、今日多くの人が否応なしに感じ取っており、ここで私が述べるまでもないと思う。内容伝達という点で落ち度はないが、議論の空気はどこまで共有可能だろうか。また必要最低限のコミュニケーションは保たれるが、実際に顔を合わせての挨拶や立ち話は難しくなり、交流の幅はどうしても狭まってしまう。そして世界のどこからでも参加は可能になった分、本編のみが残り、プログラムの付録や余白は消えてしまう。これは、やはり実際に集うことの重要性を示している。思えば、私の蓼科の思い出はいつも出発前から始まっている。テキストの準備から始まり、電車の時刻表を調べ、数日前から荷造りをする。茅野駅で他の参加者と再会し、バスに揺られてまだ雪の残るホテルに到着する。そして夜になり、ようやく開会式が始まると、私たちは長い議論と対話の日々に入っていく。こうした蓼科の日々はよく「魔の山」に例えられる。それは、まさに現在日々求められている啓蒙的態度とは対照的な、密閉・密集・密接を体現した魔空間であり、その濃密な場こそ私が蓼科で得られる贅沢な時間となっていたことに気付かされる。

しかし、今回のゼミナールにそのような濃密な場がなかったわけでは決してない。オンラインという新たな手段を通して、私は今回も数多くの出会いに恵まれた。ある日には、初対面の参加者から研究テーマに関してドイツ語でプライベートチャットが届き、しばしスモルトークを繰り広げることもできたし、いつもお名前を拝見している方々と実際に（画面越しに）会話をすることもできた。そして何より、今回もテーマと、テキストと出会うこ

とができた。3日間のオンラインプログラムを終えて感じた充足感と疲労感は、蓼科で感じるものと全く同じであったし、このコラムを書いてみて振り返ることも同様である。そして今年にはホテルの温泉と引き換えに、自宅の書斎が濃密な蓼科の異空間に変わるという新たな体験も得られた。昼間は仕事をして、夜はバーチャルで蓼科へ行くという二重生活が、その3日間はあった。夕方になると、私の画面の向こうには、もう一つの世界、「蓼科」へと続く異世界が広がる。魔の山からSF小説へ、蓼科ゼミナールを形づくる私たちの幻想空間は決してオンラインになっても失われることはなかった。

高田 梓（千葉大学）

0180

作成日 : 2021/05/28